

# 発達障害をどのようにとらえるか

広島大学大学院教育学研究科 教授 落合 俊郎

第19回教育相談全国研究集会(2012年11月15・16日開催)における講演内容より

## I はじめに

日本における障害の概念は病理学的な枠組みで考えられ、発達障害を論ずるときも必ず「脳機能の障害」という説明がついて回ります。ある県の福祉部のホームページを見てみると障害の定義が説明されており、その中で「脳機能の異常」に類した説明があるのは「てんかん」と発達障害でした。外部からの刺激や服薬を考えると「てんかん」には脳機能の概念は本人にプラスかもしれません。しかし、発達障害の場合、脳機能の異常を強調するとマイナスの部分も出ることを忘れてはなりません。保護者団体の代表から、「啓発が進めば進むほど、差別が生じるような気がする。」という言葉聞いたことがあります。つまり、面白い子ども、あるいは、ちょっとかわった子どもから「脳機能に障害がある子ども」になり、周りから人々が引いていくという現象です。このことは我々を含めて、専門家という人々は気がつきにくいことでしょう。発達障害の説明というと医学的な説明が必ず入ってしまいますが、今回は別の観点から説明しました。

ある小学校で作成した「学級担任のサポートガイド」と少年院のサポートガイドとでも言うべき「困ったときのこの一冊」～少年指導のヒント～を元にして、研修会を開催しました。使用した資料の概略を紹介します。

## II 「学級担任のサポートガイド」から

### 1. こんな子がいませんか：脳機能の異常というとらえ方をはずしてみよう！

行動上の問題がある子どもに出会ったとき、私たちは「なんと勝手なわがままな子なんだろう」と思ってしまいます。こんな子どもたちは、見た目には表れていませんが、実は周囲の状況に慣れにくく、不安な気持ちで学校生活を送っているのです。不適切な行動や言動を「わざとやっている」「ふざけている」と思わないでください。自分がどうしたらいいか分からなくて、こんな不適切な行動をとっ

ているのです。また、「しなければいけない」と分かっているのに、できなくて困っているのです。カッとなると自分を抑えることができなくて不適切な言葉を言うってしまうのです。それぞれ異なる困難を抱えて学校生活を送っている子どもたちが、困難を乗り越えられるように、サポート（支援）していきましょう。

### 2. あなたは『困ったなあ、どうしよう』と悩んでいませんか？

子どもにも教師にも困り感もあることを認めよう：環境因子が複雑化した現場：

だから特別支援教育コーディネーターが必要なのです！一斉学習やグループ学習が今までのようにうまく進みません。落ち着いて授業ができず学習が計画通り進みません。「隣のクラスは落ち着いて勉強しているのに…」「私の教え方が悪いのかしら？でも今までこんなことはなかったのに…」「なんとか勝手な行動を抑えなければ…」「家庭のしつけはどうなっているのだろう」担任が不安を抱え焦ると、学級全体も落ち着かなくなり、ますます授業は進まなくなります。

こんな時、恥ずかしいことはありません。担任の責任ではありません。誰も責める者はいません。一人で悩まないでください。同学年の先生・特別支援学級や特別支援学校の先生・校内の友だちの先生、誰にでもいいから、『困っている、どうしよう』と話しましょう。話すことが、子どもたちをサポートする第一歩です。勇気を出して、校内で困っているこ



とを話しましょう！ 校内委員会を作りましょう。コーディネーターの出番です。

### 3. すてきな1年の始まりです！：

まずは楽観的に考えて連携しよう！

勇気を出して話をしたけれど、校内の支援はなかなか進まないときもあります。状況もほとんど変わりません。自分や人を責めたくありませんが、誰をも責めないでください。

### 4. 困難をもった子どもたちとの出会いは、今までにない素敵な1年の始まりです！

つらいけど、そう考えよう。いや、それしかない！決して「あの子がいなけりゃ、まとまるクラスなのに・・・」「あの子がいなけりゃ、平和なクラスなのに」なんて思わないで「この子がいて私のクラス」と思しましょう。(支援の焦点を明確化することでもある)

### 5. 子どもの困難を理解することからはじめましょう！ 障害ではなく困難なのです。

#### LD (学習障害) の場合

- ・学習障害のある子どもの中には、読むことに大変苦労している子がいます。自分では上手に読もうと精一杯頑張っているのに、読んでいる途中でどこの行を読んでいるか分からなくなってしまうのです。
- ・お手本の文字を書き写すのに大変な苦労をしている子もいます。一生懸命手本を見ながら書くのだけれど、どうしても正しく書けないのです。
- ・「何度練習しても上手にできない」「もっと練習しなさい。一生懸命やりなさい」と繰り返し言われているうちに、意欲をなくしてしまい、ますます「なまけている、不真面目」と見られてしまうのです。

#### ADHD (注意欠陥多動性障害) の場合

- ・とにかく気が散りやすく、興味のあるものが見えるとすぐそちらに行ってしまいます。面白そうなことが「気になる」というより、気にしないではいられないといったほうがいいかもしれません。
- ・「喋りたい」と思ったとたん、喋ってしまいます。喋った後で、「今しゃべったらいけない時だった」と気づきますが、周りの人から注意や叱責をうけます。
- ・「やりたい」と思った時も、やらなければ気が落ち着きません。それを無理に止められるとカッとなり思ってもいないような激しい行動に出てしまいます。いつも叱られて

ばかりでだんだん自信をなくしていきます。  
高機能自閉症やアスペルガー症候群の場合

- ・話す内容はしっかりしているのに、意外に話の内容や周囲で起きていることが理解できていないことがあります。
- ・ゲームをしても「面白さ」を友だちと共有できないことが多く、自分だけでゲームをしているかのように楽しんでしまいます。「ルールが守れない」とよく言われます。
- ・することをいつもとがめられて、不満が蓄積してしまいます。
- ・フラッシュバック：主に音声に対して、過去の嫌な思い出をリアルに強い臨場感をもって思い出す子どもがいます。
- ・クラス内のある子どものことが気になって授業に集中できない。何もかもが気になる。もっと多くなっているその他の子どもたち

- ・この5年間、巡回指導で特に感じること：社会的格差の拡大による家庭力の低下が学習困難を引き起こしている。
- ・社会的格差の連鎖を止めないと社会の底割れが生じ、社会の質的変化が起きる：一億総中流の夢から目覚めよう！
- ・保護者が定職を得ることが、この子に大切だと思ってしまうケースが増えてきた。
- ・障害の病理学モデルでは説明できない子どもたち、社会モデルで説明できる子どもたちの急増：保護者の責任と言われても動けない保護者：受益者は社会。病理学的モデルが教育的支援の規制を作っているのではないかという疑問を持とう。

### 6. ちょっと授業の工夫をしてみませんか？ 学校・学級は生きています。活動を止めて変えることはできません。

できることからちょっと工夫してみてください。「あれもこれもしよう」と思わないでください。できることから始めれば、子どもたちが少しずつ変わってきます。そして、学級全体の児童が、授業がよく分かるようになり、基礎学力がつかます。学級も落ち着いてきます。

### 7. わかりやすい授業の創造をしよう！：

このことがユニバーサルデザインに向かう授業作りの原則

自尊感情を高めよう！：子どもたちを大切にしよう！ 気になる児童生徒をプラスのエネルギーにして授業を組み立てよう！ 量的

な面と質的な面からのスモールステップが大切です。「これくらいできてあたりまえ」と思っははいけません。自信がない子どもたちは、ほめられたことだけが心に残ります。

### 8. 学級集団づくりが大切です。

「先生は君のことが大好きだよ」というメッセージを送り続ける。「みんなそれぞれ困難をかかえているんだ」「うれしかったこと」「がんばったこと」をたくさん見つけるクラス作り。

- ・担任が仕事を頼み、働きに感謝する。「ありがとう」の言葉で役に立ったということを感じ、不安の解消になります。役割相乗型社会を意識しよう。どんな小さなことでも助けあおう。ちいさな支援を受け入れよう。
- ・帰りの会では、「うれしかったこと」「がんばったこと」を大切にす。その日のストレスを明日に持ち込まない：「良いことボックス」や「できたボックス」を作る。「ありがとうカード」を作り、友だちに「ありがとう」が言いたい時学級ポストへ入れます。そして、メール係が帰りの会の時にカードを届けます。担任も、「よかったこと」を紙に書いて発表します。そして、次の帰りの会まで貼っておきます。
- ・毎日連らく帳へ「がんばったこと」を2～3行書き、家庭と一緒にほめる。クラスの児童にも「がんばったこと」をできるだけ書き、家庭に伝える。文字だけでなく絵もかいてください。例えばニコちゃんマークを多くする。×マークや困ったマークの代わりにニコちゃんマークの数で勝負！
- ・座席は、教師の動きが見えやすく、援助が求められやすい場所。「いつでも先生が見てくれる」という安心感、支えが必要です。しかし、前の席が良いとは決まていないように思います。その子に合った席を見つけましょう。全体の流れが理解できない子どもは、他の子どもたちの動きを見て判断しています。一番前だと子どもの動きが見えません。
- ・整理整頓された教室にする。

視覚から刺激がはいるので、雑然とした教室は、イライラした気持ちを強化します。注意をそらす環境は避け、机の上も必要な学習道具だけ出させるようにしましょう。いつも目に入る教室の正面はすっきりと構

造化し、学習に必要な掲示物は横に。注意を引く学級文庫や展示棚等にはカーテンをうまく使いましょう。

### 9. いろいろな保護者がいます。

- ・保護者も養育の悩みをかかえて困っています。特に母親は家族・地域のことに心理的な負担をかかえています。それに加えて、担任から自分の子育てを批判されると、母親はどうしたらいいか分からなくなり、精神的に不安定になることがあります。母親の不安定は、児童生徒に大きな影響を与え、児童生徒の状態をさらに悪化させていきます。

まず、学校でしている支援（取り組み）を伝える。保護者も家庭でどうしたらいいか困っています。学校で行っている支援を聞いて安心します。そして、学校で行っている支援をヒントに家庭での対応を考えることもできます。よくなってきたことを伝えましょう。

- ・保護者は今までたくさん言われてきて、我が子の「できないこと」はよく知っています。いろいろ努力してみても、我が子はできるようにならないので悩んでいます。そんな時、我が子の長所や学校生活がよくなっている様子を伝えられると、保護者は「この先生は、分かってくれる」と感じます。そして、信頼関係が築き始められます。このことは、児童生徒に大きな影響を与え、状態を好転させていきます。
- ・これからどんな支援をしていこうとしているのか話をすると、保護者は我が子を担任が応援してくれていると感じます。どうしたらいいか悩んでいる保護者は担任に相談できると感じます。個別の支援の方法は校内支援委員会の中で、考えていきましょう。
- ・まず一番に、「子どもをほめる」という「共通すること」を始めましょう。困難を抱えた児童の連絡帳に、担任が毎日「がんばったこと」を1～2個、簡単に書きます。（短くていいから毎日続けます）保護者に連絡帳を見てもらって、毎日学校でがんばったことをほめてもらいます。最初は、「がんばったこと」を見つけるのに苦労しますが、少しずつ子どもの見方が変わり楽に書けるようになります。保護者も最初は、ぎこちないほめ方ですが、少しずつほめ方が上手



になります。余裕があれば、クラスの児童全員に、時々「がんばったこと」を書くと、保護者全員とうまくコミュニケーションがとれるようになります。

- ・保護者と児童の抱える「困難を理解」し、認めていく：保護者と信頼関係ができてくると、子どもの抱える困難についてじっくり話ができるようになります。母親から、幼少期のことや将来への不安が話されることもあります。母親に共感して話を聞きましょう。そうすると、よりよい支援を求めて、医療機関や相談機関へ行くことを勧めていくことができます。
- ・周りの児童の保護者へ説明をしましょう：周りの保護者への理解を進めるには、学級での実践を見せることが大切です。子どもたちが前向きに何事にも取り組む姿勢がある時、子どもが必要としている特別な支援に、回りの保護者の理解が得られると思います。

### Ⅲ 私が少年院から学んだこと： 特別支援教育との比較

「困ったときのこの一冊」～少年指導のヒント～  
から 名古屋矯正管区(2003)

この冊子は300ページにも及ぶもので、少年院の様々な経験を冊子にまとめたものです。少年院と刑務所を誤解している人がいますが、多くのことを学びました。職業として見るとかなりの厳しさもあることも教えられました。教育関係者は、児童・生徒・学生が卒業すれば、戻ってくることはありません。学生の場合、大学院生として同じ場所に戻ってくることはあります。しかし、少年院の場合、再犯して戻ってくる場合があります。病院であれば手術や投薬という手段を使って、病気の再発を防ぐことができます。しかし、少年院の



場合、再犯しないようにするには、人と人との関係の中で信頼関係を作り、少年の心に訴え、自尊心を高めかけることしかありません。そして、再犯が起これば、自分がだまされたり、力が十分でないと批判される大変な世界でした。紙面の都合上、私の責任で選択し紹介します。

#### 1. プロ意識を持って ー高い理想と使命感ー

「少年院の教官になりたい」と思ったときの自分の原点を大切に。

#### 2. 父となり母となり ー少年を見つめる目ー

- ・自分の子どもに同じ事が言えるか。自分の家族に同じ事が期待できるか。彼らは別世界の人間ではない。
- ・問題を起こすから「問題児」だと決めつけるな。
- ・少年を小馬鹿にするな：少年を指導するにあたって「こんなことぐらい知らないのか、そんなことくらい分かるだろう」と少年に言うことがあるが、決してこのようなことがあってはならない。少年の気持ちをいじけさせ、生活意欲をなくさせ職員への信頼を失わせる。それ以後、少年は指導に素直にに応じてくれなくなる。
- ・少年の生い立ちを知ることから教育が始まる。  
非行の原因は生活環境に起因していることが多い。その原因を探り、少年の教育を行う上で欠かせない。目先の院内生活にとらわれず、少年簿や調査記録をよく読み、少年の生い立ちを知ることから教育が始まることを忘れないでほしい。
- ・いつも問う、これで良いのか なぜこうか。  
原点と理念に戻って。矯正処遇に定立した法則は発見されていない。そこで、処遇実践の結果や少年をめぐる派生する問題を常に吟味しながら、次の一手を考えていかなければならない。矯正教育は、少年から学び続ける営みであるといえる。
- ・少年の行動観察をしているが、少年からも行動観察されているのだ。

#### 3. 人の痛みを知れ ー共感性 寛容 誠実

- ・人の痛みを知れ・大きな包容力と厳しいチェック・自分が悪かったら謝ろう：人間には誰でも失敗があるもの。少年と生活を共にし、範を示す存在としての職員とて例外ではない。ケースとしては、様々な場面が想起されるが、失敗をしたら謝る。このご

くごく当然のことではあるが、相手が少年であるとなると、変に肩肘を張ってしまうことはあるまいか。素直に「ゴメン」、その姿が少年をも素直な方向へと導く。

#### 4. 個別面談の徹底を

- ・少年の評価には減点法より加点法を
- ・少年には「やらされた」体験より「自分でやった」「自分で考えてやった」「自分で決めてやった」体験を

少年院では秩序ある生活を少年に送らせるために、たくさんの規則を作り、それ守らせることも、少年の入院前の放縱な生活態度を考えると必要な体験であるが、少年の側に「やらされた」という意識がある限り、自分の行為に対する責任を感じることも少ないということを忘れてはならない。責任感の涵養は少年院の最も大切な教育目標の一つである。

#### 5. 聞き上手になろう

##### —適切な指導を考える—

- ・少年の指導は太鼓を叩くが如く 強弱あわせ持つべし：少年の問題性や資質はそれぞれ違う。能力の低い少年に高いレベルの教育を求めても無理がある。それと同じように、能力の高い少年に低いレベルの教育を行ってもいけない。個々の資質をよく見極め、その資質に応じた教育を行わなければならない。
- ・問題があるときこそ指導のチャンス・感情的な反応には冷静な対応を・話しは目で聞け・聞き上手になろう・聞き役に徹する・ほめることを忘れるな・結果だけでなく過程もほめる・叱ったあとのアフターケアを忘れずに・あせるな！答えは一つではない・分からないことは分からないと言おう・高飛車な言い方は避けよう・成長を期待する気持ちが大切・むやみに指導を加えるな・親子問題を指導する手がかりは、その親を知ることから始まる。

#### 6. 風通しのよい集団作り

##### —集団指導の大切さ—

- ・風通しのよい集団作り：管理のための集団ではなく、教育的要素を取り入れた自律的・自主的な集団作りが必要である。法務教官と少年が共同して、息の通った向上的精神の漂う（寮）集団風土の醸成を計っていくことが大切である。

#### 7. 情報は個人化よりも共有化

##### —情報と組織—

- ・情報は個人化よりも共有化・ハウレンソウ（報告・連絡・相談）の徹底・行動観察票は足で書け。
- ・書く！！（記録する）；行動観察は、記載されて初めて生きる。言葉での引き継ぎは途中で歪められたり消滅したりする。その場にはいない人が、後から読んで、ありありとその状況が分かるように書かなければならない。そして読む人は読み解く技術を要する。
- ・機を逸するな：注意や叱責はタイミングよく行うこと。時機を逸すると効果が薄れ、場合によっては「何で今ごろになって」とかえって反感を持たれ、指導の効果が上がらない。

#### 8. 五感を働かせよ

##### —心のアンテナを高く—

- ・自分の直感を大切に：処遇の現場においてはマニュアルが大切であるが、マニュアルどおりにいかない場合がほとんどであり、そんな場合には自分自身のこれまでの現場の中で培った直感が頼りである。この直感を磨いておく必要がある。
- ・目を離すな 五感を働かせよ・集団の雰囲気を感じ取るセンスを磨け・少年の語る言葉よりも語らない言葉を聞け。

#### 9. 今日の黙認は明日のトラブル

##### —少年たちを守る—

## IV さいごに

学級担任へのサポートガイドと比較して、少年院の場合はかなり深刻な状況の子どもたちが入っています。しかし、この2つの資料を比較して見ると同じ内容が書かれてあることに驚くでしょう。生徒指導を担当する教員、その他の専門家は特別支援教育から問題提起に対して、生ぬるい、あまやかしだと考える人々もいるでしょう。また、特別支援教育の分野の教員は、自分が実践している内容は、生徒指導ましてや少年院で行っている内容と正反対ではないかと思っている教員が多いのではないのでしょうか。

このように2つの資料を比較すると、現在直面している様々な課題を解決するために何が必要なのか見えて来たのではないのでしょうか。